

修道

No. 58

題字は吉田学(高21)書

修道学園同窓会連合会
修道学園(中・高)同窓会

〒730-0055 広島市中区南千田西町8-1
TEL(082)241-8291 FAX(082)249-0870
TEL(082)241-6686(同窓会直通)
E-mail dosokai@shudo-h.ed.jp



目次

同窓会ニュース

修道学園(中・高)同窓大会報告… 宮下 亮介 …1138

同期会報告

修道『被爆60年の集い』の開催… 多田 二郎 …1140
「修二会」(修道高校2回)の報告… 林 孝治 …1142

特別寄稿

母校古昔—終戦直後の修道中学校… 川上 貞光 …1144
元本校教諭(社会科)石田道俊先生白寿のお祝い
河野富士雄 …1148
「修路記」のこと …… 畠 眞實 …1149
校祖山田養吉物語⑩「十竹藍歌」… 仲井 正美 …1154
東京は金 広島県・市は銀メダル… 林 孝治 …1156
平成17年度修寿会…… 藤澤 洵 …1158

学園だより

第58回修道高等学校卒業式 ……1159

人物往来

ハーンが愛したニューオーリンズ… 風呂 鞏 …1161
「やるぞ」意欲だそう …… 林 有厚 …1161
料亭「三滝荘」幕閉じる… 藤田 欣也 …1161
防犯に地域連携必要…… 広畑 史朗 …1162
飛び石 よみがえる深み… 上田 宋岡 …1162
自分の哲学確立して…… 鵜野 俊雄 …1163
魅力輝く広島へ住民が鍵… 新原 芳明 …1163
耐震偽装 信頼回復へ法整備を… 錦織 亮雄 …1164
規模生かし中小に貢献…… 高木 一之 …1165
今年「バトル」の年…… 白倉 茂生 …1166
同級生交歓…… 加藤 俊宜 …1166

訃報

……1166

当選おめでとうございます

……1166

お詫びと訂正

……1166

事務局だより

……1166

修道学園（中・高） 同窓大会報告

第49回世話人会 代表 宮下 亮 介
と き 平成17年9月10日
と ころ リーガロイヤルホテル広島



平成17年度修道学園（中・高）同窓大会は、我々49回卒業生が世話人として運営を担当させて頂きました。

「卒業後八年経ったら同窓会が云々」とは、在学中に耳にしたことこそありましたが、当時の私にとっては「そんな先のこと・・・」でした。しかし目に見えずとも時間だけは確実に過ぎていくもので、無為な学生生活を経て社会人として日々の仕事に追われていくうちに、いつの間にか七年半もの月日が流れていたのです。

同窓会に携わることになったそもそものきっかけは、48回生の先輩から声をかけられたこと。当時は同期との付き合いも疎遠になりがちだった為、10人近い同級生が参加していたことには驚きでした。最初は軽い気持ちで参加したものの、リーガロイヤルホテルの1ホールを貸し切って、また広島の政財界を代表する先輩方を迎えての大会であることを知ったときには既に遅すぎました。世話人を経験された諸先輩方と同様「大変なことを引き受けてしまった」というのが第一印象でした。と同時に「このメンツ

が居れば、1年もあれば大丈夫だろう」という楽観も持ち合わせていたのですが、時の流れとは無情なもので、1年というのは「アッ」という間に過ぎていきました。同期で何度も集まり、旧交を温めるには十分でしたが、実務に取り掛かるとなるとなかなか第一歩が踏み出せないままでした。広告集めとチケット販売の2つが最重要事項だということは何度も聞いていましたが、実際に活動を始めるとなると「何から手をつけていいのかわからない」のが正直なところで、気がつけば何もしないうちに広告の締め切りだけが迫っていました。

危機感から重い腰をようやく上げたはいいものの、様々な方面で活躍され多忙な毎日を送られている先輩方とはなかなか時間が合わず、最初はお話すらさせて頂けない状態でした。しかし執念深く電話をかけ続け、直接お話しする機会を作って頂いたときにはチケット販売や広告掲載の依頼に快く応じて頂き、また同窓会という枠を超えて多くのアドバイスを頂くことができました。同時に不躰から叱責を頂くこともありましたが、その全

てが新鮮な経験でした。またそうして活動を続けていくうちに参加してくれる同期も次第に増え、旧交が友情となり更には強い絆へと深まっていくのを日々実感しました。

大会当日の運営については「49回生の同窓会」として記憶に残る会にしようと思いました。修道大学チアダンス部や広越グループ・タカタグループの方々の御協力で、例年以上に「華」のある会にすることができたと思います。「修道」のカラーとは反するとの批判もあるかもしれませんが、「49回」の色は存分に発揮できたと確信しています。

全員が輪になっての校歌斉唱、恒例の行事ではありますが、輪を組んで下さった先輩方を見て「これだけ多くの人に参加してくれたんだ」と思うと、胸が一杯になりました。同時に「年に一度の同窓会」を遂行し終えたという解放感とともに

「自分達の同窓会」を開催したのだという達成感とから頭が真っ白になってしまいました。

「修道の伝統」と一口に言いますが、それは280年という時間の経過とともに自然に出来るものではなく、人の手によって生み出されていくものなのだという事を、今回の同窓会によって実感しました。先輩と後輩、恩師と教え子、或いは同級生同士、それらが何かのきっかけで知り合い、或る目的の為に協力し達成の喜びを分かち合うこと、そうした人の出会い・結びつきが伝統として新たに紡ぎだされていくのだと実感しました。

最後になりますが、今回の同窓大会に携わるきっかけを与えて頂き、また御多忙にも関わらず多大な御尽力を頂きました先輩の皆様方、恩師の先生方、そして49回生の同志達へ、本当にありがとうございました。



第27回卒業生より学園へ寄付金贈呈



広島修道大学チア・ダンス部による華麗なダンス

同期会報告

修道『被爆60年の集い』の開催

多田二郎（高校1）

去る平成17年8月6日に我々旧中39回・高校1回（三九一会・八六会）の同期生が集まり『被爆60年の集い』を開催したが、思い起こして見れば昭和20年8月6日のあの衝撃は、我々にとっては一生忘れることの出来ない出来事であり、当時旧中3年生であった大部分の生徒は霞町にあった陸軍兵器補給廠（爆心地から約3kmの地点）に、また可部線沿線・横川・三篠・牛田・白島・中広方面に居住していた生徒の一部は、三篠にあった合同製鋼所（爆心地から約1.8kmの地点）という軍需工場にと分かれて、昭和19年に施行された「国家総動員令」により学業を捨てて動員学徒として働かされていたのである。

合同製鋼所で被爆した生徒達（八六会）は、永年に亙り亡くなった級友の慰霊の集いを8月6日に開催しており、平成16年に開催した忘年会の席上で、「来年は被爆60年となる節目の年になるんじゃないが皆が元気な間に同期生達と逢いたいもんじゃのう 三九一会の全員を対象にして開こうや 誰か世話をしてくれんかいのう」という発言があり、参加者の中から取り敢えず4人を幹事にして実施に向けて企画することになった。

実際にプランを樹てる段階で、毎月2回程度の会合を持ち検討している最中に、幹事の一人が突然の病で急死するというハプニング等、紆余曲折があったもののなんと6月初旬に全員に向けて案内状を発送することが出来たのである。

8月6日当日は60年前を思い出さすような暑い日ではあったものの、東京・大阪など遠距離からの級友を含めて40人の参加があったが、新幹線口11時の出発予定の直前になっての欠席者や新たな

出席者が出るなど、多少のトラブルはあったが何とか30分遅れで出発し、先ず三篠の合同製鋼所跡に行き当時の思い出話（工場の全壊・高橋先生の救出等）をした後、霞町の兵器補給廠跡に向かい当時の残存建物の一部を目の当たりにして、さらに足を延ばして母校である修道学園に立ち寄ったのである。

現在の母校には当時の面影は全く無く、ただ山田十竹先生の胸像と昔ながらの正門が残っていただけであったが、坪井校長先生から色々なお話を伺って一緒に記念写真を撮ったり、校舎の外観を眺めて感慨にふけた後、終着の平和公園に向かい慰霊碑に鎮魂の祈りを捧げ、懇親会開催までの時間をそれぞれ公園内の諸施設を見学する等して、メルパルク広島に再集し全員で記念写真を撮り、物故者（77名）に対する黙祷から始まった懇親会へと移って行ったのである。

懇親会は司会者の軽妙な司会によって和やかな会となり、参加者の中には何十年振りの再会にお互いの顔と名前が一致せず、名札を読み合って確認して懐かしんだり、あっちのテーブルこっちのテーブルと歩き回って旧交を温める者等あってアット言う間の2時間半余りの短い時間ではあったが、最後には全員が肩を組み「安芸の小富士に茜さし・・・」と、修道中学校校歌を大声で合唱し皆晴れやかな顔で互いの健康と再会を約しながら散会したが、級友の元気な姿を確認し合い旧交を温めることが出来た非常に有意義な集いであったと思う。

参加してくれた級友諸君元気でう また逢おうやあ



修道『被爆60年の集い』平成17年8月6日 於：メルパルクHIROSHIMA

重谷	西村	川尻	坪田	高瀬	児玉美絵子	横山	河内	津川	玉川	白井	大野	篠塚	麓	谷川	佐藤	平田
篤男	一正	悦三	幸雄	皓	弘子	一	浄	光昭	仁	清治	信彦	忠義	嘉祐	紀正	正晴	
		松浦	両祖	岡島	森本	松浦	奥本	山田	白石	三宅	縫部					
		武則	勝	元信	昭男	正和	博	足穂	義明	利正	貞彦					
坂本	阿須賀雄三	岡野	永田	地土井襄璽	小尻	多田	天保	大道	石本	吉田	徳村	原田				
等		健	信雄	正俊	二郎	勝明	忠晴	芳郎	博行	一郎	三郎					

同期会報告

「修二会」(修道高校2回)の報告

(原子爆弾は語り続けるヒロシマ60年)

林 孝 治 (高校2)

サブタイトルは(株)社会評論社 発行の著者「織井青吾」(本名 浜井隆治)君によるものであります。彼が東京より、平成17年9月10日(土)の修道同窓大会に出席することとなり、大会開始前の15時にリーガーロイヤルホテル広島33階のスカイラウンジ・リーガトップに急遽集まることとなりました。広島在住の有志、原爆サバイバルが、彼の上梓祝を兼ねて、久しぶりに、12名ほど集まり、あとき「どうしたんならー」と語りあっていたら3時間は瞬間に経過してしまいました。

原爆死没者50回忌法要を我々「修二会」の最後の集会として、協力しあって、実施してから早くも、10年が経過しました。その後、修道学園の発刊した「流光」と織井青吾君の著書の中に修道中

学校2年生は「その瞬間、雑魚場町(現市役所東)の建物疎開作業に出勤した144名のうち136名の生命は奪われ、出勤途中、たまたま欠席した生徒10数人と日本製鋼所西高屋工場に動員中の50名は死を免れた」と記録されております。生死を分けた、この記録に今も「修二会」の一人ひとりには心の芯部が痛むのです。

写真は、後列左より、

森島 剛・林 晃司・西田頼信・福田秀樹
下村幸男・八木圭三・前田一之

中列左より、

木原 昭・谷尾 励・浜井隆治(著者)

前列左より、阿部 正・林 孝治



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の紹介 (同館のパンフレットより)

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、国として、原爆死没者の尊い犠牲を銘記し追悼の意を表すとともに、永遠の平和を祈念するためのものです。併せて、原爆の惨禍を全世界の人々に知らせ、その体験を後代に継承するための施設です。

業務案内

当館では、「平和祈念・死没者追悼空間」を設けるとともに、原爆死没者のお名前と遺影の登録及び被爆体験記、手記などの収集を行います。これらを通じて核兵器の廃絶を内外に、広く訴えていくことも重要な役割です。

■原爆死没者のお名前と遺影■

原爆死没者のお名前と遺影を登録し、永久に保存します。お名前と遺影は、地下2階の遺影コーナーと地下1階の体験記閲覧室でご覧になれます。

■被爆体験記■

原爆被爆者やその遺族、友人が書いた被爆体験記、手記などを整理し、一人ひとりの「こころとことば」で、被爆の実相と平和への願いを伝えていきます。被爆体験記などは、地下1階の情報展示コーナー、体験記閲覧室でご覧になれます。

※当館では、原爆死没者のお名前と遺影や被爆体験記、手記を募集しています。ご協力をお願いいたします。

遺影コーナー



原爆死没者のお名前と遺影を公開し、原爆で多くの人々が亡くなった事実を伝えます。

12面の大型モニターには、原爆死没者のお名前や遺影が映し出されます。

また、検索装置では、個々の原爆死没者を検索できます。



銘文と「8時15分」を表すモニュメント



体験記閲覧室



《追記》

平成14年8月オープン of 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館(082-543-6271)に修道中学校の登録(氏名・遺影)を検索しますと48名と非常に少なく誠に残念でなりません。因みに、広島一中123名、二中270名・山中高女220名の方々が登録されております。前述の「流光」によると修道中学校教職員・生徒の原爆死没者は201名となっております。遺族・親戚の方で登録しようと思われる方は上記の電話に問い合わせてください。

母校今昔

— 終戦直後の修道中学校 —

川上貞光 (旧中38)

第2次大戦が終わって60年、当時修道中学校4年生15才であった私も平成17年10月で76才となりました。終戦直後の母校に関する状況を知っている人も年々少なくなり、当時の目撃者、体験者の一人として記憶に残る思い出を書き残しておこうと考え筆をとりました。以前平成6年9月1日発行の「修道」No.13に「修道中時代の思い出」と題する私の記事が掲載されておりますが、その続編と考えて頂いて結構です。但し何分60年前のことであり、当時記した私の日記を見て書きましたが、日記に残した以外の点で記憶違いもあるかと思えます。その点何卒御海容下さい。

学校の復旧作業と授業

私の日記を見ますと昭和20年9月1日(土)雨後曇として以下次のように書いています。「午前9時南千田町修道中学校に参集す。再出発の念高らかにとなへ、種々注意ありて午前11時散会」(原文のまま) この現在で云う全校集会は8月15日玉音放送で長い戦争が終わってから2週間後のことです。これよりさき昭和19年6月30日勤労動員令により我々の学年(昭和17年4月入学組)は学校へは登校せず、毎日江波町の三菱重工業(株)広島造船所へ通勤し、造船作業に従事するようになってからまさに1年2ヶ月ぶりの登校で久しぶりに見る母校はいたましい惨状を呈しておりました。この情景は今もはっきりと目にやきついております。集合した全校は1年生から4年生まで(当時は戦争による就学年限短縮で従来の5年間就学が我々の1級上のクラスから4年間となり従って我々が最上級生の4年生でした。)が運動場に

整列し点呼をとったのですが、人数は予想外に少なく、特に2年生が僅かであり、その時はじめて彼等の大半が市内の家屋疎開作業中に被爆し死亡したことを知りました。その他の学年も9月1日集合の連絡が届かず参集者が少なかったものと思われます。その日に我々が目にしたのは校舎を中心とした建物が原爆の爆風により倒壊し屋根が押しつぶされたような恰好になっており、僅かに爆風に向かって縦に建っていた敬道館とプール側の2階建て4教室のみが倒壊を免れ辛うじて外形のみ残っているというまことに悲惨な状況でした。しかし火災により全部を焼失した学校も多い中で机その他の器物が残っただけでも幸せと考えねばならない時代でありました。さて現実に復旧作業が始まったのは日記によると9月6日(木)のようです。更に9月15日(土)本格的に今後のスケジュールが決まったようで当分の間雨天の日は学校自体休みとし、その他の日に我々第4学年は月・水・土の3日間登校、そのうち月曜は校内復旧作業、水・土曜は授業と日記に書いております。1~3学年も同じような計画で曜日のみを変えたものと思われます。

校内復旧作業はまず教室を押しつぶした屋根の下から机を引き出すことから始めました。かつて銃剣術の訓練に使用した木銃を各自持って屋根をたたき破り中の机を引き出すのです。

一方授業は先に書いた敬道館とプール側の4教室を交互に使って行われ、授業以外の学年は復旧作業に当たりました。原爆で家もろともすべてを失った生徒も多く教科書の如きは何人かに1冊といった有様でした。

小銃の運搬

戦前、戦中中等学校（中学校、商業学校、工業学校等）以上の生徒、学生には学校教練と称する軍事訓練が必須科目として定められておりました。そして3年生以上が銃を扱う執銃訓練を課されており、陸軍から派遣されている現役将校（これを配属将校と申しました。）を中心に軍歴ある教官が陸軍の軍服姿で訓練指導に当たっておりました。当時運動場の一角にあった武器庫には数多くの小銃（実弾はなし）と教練に必要な備品類が格納されていました。

戦争が終わり学校教練は直ちに廃止されましたが、問題は小銃の処置です。おそらく県か市からの指示であったと思われませんが、小銃は海田市にあった陸軍兵器補充廠の分廠に集積することとなり、最上級生である我々4年生が各自1丁あて肩に負い、残暑きびしい中南千田町からはるばる海田市まで運びました。

海田市の所定場所には主として小銃と若干の軽機関銃やサーベル（指揮刀と称しました。）等がいくつもの山をなしてうず高く積み上げられていた光景は今もありありと覚えています。当時小銃には天皇陛下の兵器ということで菊の御紋章が銃身に彫りつけてあり、命よりも大切な神聖無比のものという思想が浸透していただけに無雑作にスクラップの山と化した小銃をみて敗戦の悲哀と価値感の崩壊を痛感したものでした。

バラック建て校舎の完成

学校の復旧作業と残った教室を交互に使うって授業の行われた昭和20年も終わり、翌昭和21年バラック建てながらやっと待望の教室が完成し教室を交替で使用する不便な状況から何とか開放されました。そして我々も就学年限が元にもどり5年生に進級しました。

ここで校舎完成につき書き残しておきたいのは窓についてです。窓枠はあるもののガラスは当時入手不可能の時代です。そこでガラスの代用品として登場したのが風船爆弾の球体外装に使用した

紙です。では風船爆弾とは何か。戦争末期に考案された新兵器（むしろ珍兵器というべきか）で大きさからいえば風船というよりも気球であり気球爆弾というべき代物です。この気球に爆薬を搭載し、季節風にのせアメリカ本土へ向けて茨城県境に近い福島県勿来（ナコン）の基地から飛ばしたのです。

この大きな気球を作るゴムはなく、「こうぞ」、「みつまた」を使ってできた和紙を何枚も重ね合わせた丈夫な材料で大きな紙製気球を仕上げるのです。この製作のため東京有楽町にあった日本劇場を工場として利用したそうで劇場は閉鎖です。1日20個程度を飛ばした由で空を行く大きな紙製気球の姿は異様な光景だったでしょう。但し戦果は零でした。

さて戦後にこの紙製気球の材料となった丈夫な和紙を学校がいかなる経路からか入手しこれを窓ガラスの代わりとしたのです。

要領は和紙を窓枠のサイズに合わせて切り暫らくプールにつけておきます。やがて表面がヌルヌルになった頃ひき上げて窓枠にびったり張りつけ直射日光にさらしておきます。間もなく乾燥するとまるで太鼓のように叩けばポンポンと弾んだ音をたてます。極めて丈夫でまず破れることはありません。しかし何といてもガラスと異なり紙ですから部屋は暗く、明るい戸外にでた時目がチカチカした記憶があります。

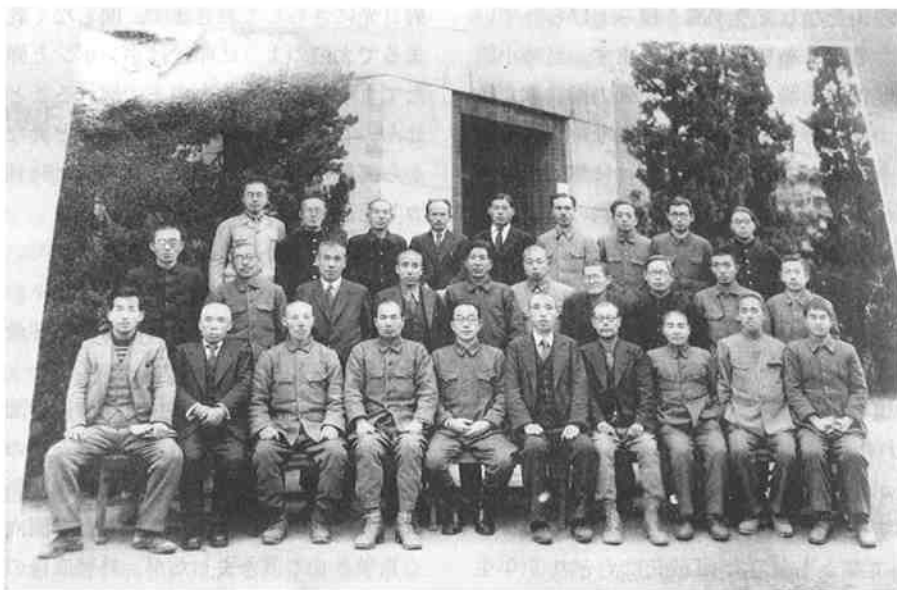
昭和22年3月6日講堂はまだできていなかったこのバラック建て教室を使い我々の卒業式が行われました。思えばこれが旧制中学最後の卒業式となりました。

時を経て平成15年9月13日、修道学園に於ける平山郁夫画伯製作の「希望の光 安芸の小富士」と題する陶版画除幕式および新校舎、新武道場の御披露に招待され立派に完成した学園内をくまなく見学させて頂きましたが、終戦直後の惨状とその後の復旧にまつわる思い出が心の中によみがえり感慨胸に迫るものがありました。

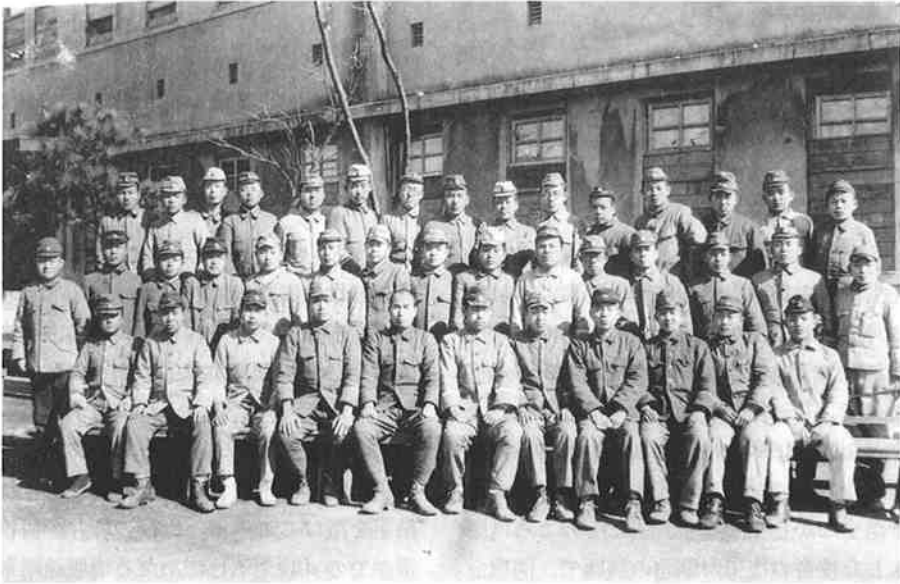
最後に母校修道学園の今後更なる御発展を心から祈念して格筆致します。



終戦直後の修道中学校正門。後方は事務室の建物で窓ガラスの代わりに板がうちつけてあります。当時この建物に高橋彌一先生（英語担当）の御一家が住んでおられました。（下写真、前列左から3番目が高橋先生）



同じ頃の修道中学校教職員一同。陸軍中将であられた国崎登校長は北海道兵団長として応召中。また戸田貫一教頭（校長代理、数学担当）は被爆死で、校長、教頭共不在という異常な時代でした。



昭和22年2月頃卒業を前に撮影したものと思われます。中央無帽の方がクラス担任の松石義郎先生(物理担当)で、他にほぼ同人数の2クラス(秋山組、中村組)あり、昭和22年3月6日卒業の旧中38回卒です。

当時は戦闘帽、カーキ色の服(一部は軍服)、軍靴といった服装で左右両袖に白線を巻いているのに御注意。この白線は昭和19年頃からつけた記憶があります。後方は倒壊を免れた敬道館。松石先生の左隣が私(川上)です。

特別寄稿

元本校教諭(社会科)石田道俊先生白寿のお祝い

河野 富士雄 (元校長・高校4)

石田先生は旧中15回、修道在勤は昭和22年11月～40年3月です。先生が大連から引き揚げて母校に就任されたころは物資、特に食糧がたいへん不足した時代で、「まず腹いっぱい食わさじや」と売店のうどん販売に尽力されました。当時教えを受けた4回生の中には、石田先生からうどんを連想する者が少なからずいます。またそのころは原爆で倒壊した校舎の復旧が緊急の課題で、同窓会を中心に熱心な募金活動が繰り広げられておりました。先生は、のち永く学園理事を務めていただくことになる若手財界の人たちといっしょに資金集めに奔走されました。これらのいささか教員離れしたご活躍ぶりが、多くの教え子たちがいつまでもお慕いする最大の理由でしょう。

その石田先生の白寿をお祝いする会が、先生が

現在お世話になっているグループホーム「はるかぜ」の主催で、1月14日のお昼に、安佐北区の亀山南集会所で開かれました。「はるかぜ」のお仲間やご近所の人たち、それに弟子代表の4回生など50名以上がホーム心づくしのお祝い膳を前に待つ中、先生は末娘さんにエスコートされて万雷の拍手を浴びてご入場。母校の坪井 悟校長先生や選挙での「教え子」にあたる増原義剛衆議院議員(16回)と藤田雄山広島県知事(20回)ほかあまたの祝電披露、皆さんのお祝いの言葉などを終始おだやかな笑顔で聞いておられた先生のご挨拶は場の雰囲気を読んだウイットに富むもので、しめくりは「みんなわしみたいに長生きせえ。わしより先に死ぬものはその前に電報をよこせ」と、石田先生の面目躍如たるものでありました。



「修路記」のこと

畠 眞 實 (前校長・高校7回)

2004年12月5日、日曜日の午後、こんなメールをもらった。『修路記』明治23年修道校主山田養吉 撰と書いた石碑があります。漢文で意味不明です。私の家内が発見し、今見に来ました。元気にしていますか。」とあった。修道の同期生、Mさんからである。そして「追伸 等身大の大きさですよ。鶴見橋の平塚よりの土手(公園)に立っています。」とあり、さらに「追伸2 こういう時カメラつきの携帯があればよいと思いました。」さらに「ぜひともあの石碑が日の目を見るようにご努力ください。」とあった。

ちょうど山田十竹先生の遺品が先生のお孫さんに当たる山田弘秋さんから修道に提供され、その整理をしてもらいたいと依頼を受けていたところであったので、何かの縁を感じた。

早速12月10日の午後デジカメを持って教えてもらった場所に行った。確かにあった。とにかくカメラで撮って帰った。パソコン処理をして石碑の文字を出してみると、歳月を経ているため、画数の多い文字は判読しにくい。判りにくければ、その文字に水を掛けてみるのも一つの方法だと知人に教わり、またその石碑を見に行った。水を掛けてみると少しは分かるようになったものの、この字だと断定しかねるものがいくつかあった。

前後のつながりからあれこれと文字を推定しては辞書を繰り返し引きながら何とかこうではなからうかというところにこぎ着けた。したがって或いは見当違いをしているかも知れない。大まかな文意を読み取っていただければ幸いである。

もう一つ宿題が残っている。それはこの石碑が原爆投下以後どのような経緯によって現在地に建立されたのか、それを知りたいというMさんの問いかけに答えなければならない。少しずつ当たっているが未だに手がかりがない。何とか早く知りたいと思っているところである。

2005年11月11日 安佐南区民文化センターの中

の広島市図書館で「広島の石碑 心と形」(1989年発行 広島市教育委員会)という本を見つけた。その中に、この「修路記」のことが掲載されていた。写真に添えられている文章に「建設の由来として、旧鶴見橋が未建設の頃、対岸に舟で渡るのに水難事故が多発していた。それを救うために、鶴見橋の京橋川岸に『延命地藏尊』が祭られた。そのそばに明治23年鶴見橋が建設された。」とある。しかし、これではこの「修路記」が鶴見橋が建設されたことに関して書かれているように受けとめられる。それでは「修路記」の碑文に書かれている内容にはそぐわない。この点に疑問が残る。そこで教育委員会に電話してこの碑のことに関して尋ねてみると、碑に関しては広島市中区役所の管理部に聞いてみたらと教えられた。

それで11月14日、広島市中区役所の管理部を訪ねた。管理部の人が石碑などを記している帳簿を持ってきてくださった。見ると「修路記」の写真があつて、碑文が書き写されていた。この碑に関しての調査は1991年にされたものだと言われた。この碑が原爆投下以後どのような経緯で再びこの地に建てられたのか分かりませんかと尋ねると、それは分かりませんという答えが返ってきた。それで課題は課題のまま残ることになった。もう一つ問題があった。それは、私が解読したものが果たして正しいかどうかということであった。書き写されている碑文と引き比べてみた。ほぼ合致していたので安堵した。ただ、書き写された文字で文脈上、その字では違うのではないかと思われるものもあった。その点についてはお節介のようでもあったが、管理部の方に指摘しておいた。

この碑の存在を教えていただいてからちょうど一年を経過する。この碑のことはこの一年私の課題として常に頭の中にあつた。何とか一応の区切りをつけておかなくはないという思いがあつた。

先日、祇園の安神社の前にある石碑が山田養吉

先生の撰であることを知った。その石碑はこの地の出身の医師で教育者であった太田三益の頌徳碑である。その碑文も漢文で書かれているので内容をわかりやすく読み解かなくてはならない。文字は写真に撮ってみてほぼ判読できたが、念のため修道の記念品室に所蔵されている先生の遺稿の中に原稿がありはしないかと思い、探してみるとこの碑文の原稿があった。嬉しく思った。この碑の

存在は、地元の公民館が手がけている祇園・山本の歴史探訪の文章を書いている仲間の人達と祇園地区の実地踏査をしている時に教えていただいた。

一つのことをきっかけでいろいろな展開があるものだと思った。まだ所々に山田十竹先生の撰による石碑があると聞いている。そのうち改めて紹介できればと思っている。



【原文】

修路記

我廣島市自竹屋町至段原村鶴見橋田間行路迂而窄卑而湿不可車不可馬濼則人亦不可行於是八木理助菅原英之助木本岩助絹川保藏龜屋圓晧池田格次郎長尾慎平七人為侶首捐資修繕應者三十餘人梶吏西村益三亦與而有力馬自竹屋町經田中町至鶴見橋通直道長二百二十七步役夫二百人費財七百金創工於明治庚寅七月告竣於明治辛卯四月比於故道捷八十歩廣十有二尺高二尺則車可行馬可行濼亦行人人大喜於是諸人請余記其事石嗚呼世皆設溪壑於方寸中而計利己拋不關於痛痒之毛爪而利人亦不為也或利人也而問其効則茫乎如捕風捉影矣而今諸人則不止不利己捐己而利人而其効又如余亦每往還此路喜其便也不辭而記之

明治廿三年 修道校主山田養吉撰 必正舎主頼元啓書

修路記 注

- 迂 (う) まわりくどい 遠回りする 回り道
 窄 (さく) せまい せばめる
 卑 (ひ) ひくい 卑湿 土地が低くてじめじめしている
 濼 (しつ) じめじめしたさま
 濼 (ろう) ながあめ 路上や庭に溜まった水
 於是 (ここにおいて) そこで
 為侶首 (りよしゆとなり) 仲間の先頭にたって
 與 (くみす) 物事をするのに一緒に仲間になる
 力馬 (りきば) 労役に使用する馬のことか
 捐資 (しをすて) 資金をだして 捐 私財を出して人を助ける

明治庚寅 (かのえとら) 明治二十三年

明治辛卯 (かのとう) 明治二十四年

竣 (しゆん) 竣工、工事の完成

比 (ころおい) ころ

捷 (はやし) はやい 捷路 近道

溪壑 (けいがく) 大きな深い谷 次々とおこる欲望のたとえ

抛 (なげうつ) 惜しげもなく差し出す

方寸 (ほうすん) 広さが一寸四方 わずかな大きさ 心の中心

痛痒 (つうよう) いたみかゆみ 心身の苦痛や物質的な損害

茫 (ぼう) ぼんやりしていること

往還 (おうかん) ゆきかえり

撰 (せん) 事柄をそろえ集め、其れをもとに文章をつくる

壑 この文字は字画も多く、碑文でみたときには分からず、最初傍の部分ははつきりわかったので「軽」という文字かと思った。しかし、扁に当たる部分がどうも「くるま」扁とは異なるように思われ、それに、それでは文意が通じない。そこで、念のため「溪」を辞書でひき、熟語をみると「溪壑」という熟語があった。あるいは、これは「壑」とう漢字ではないかと考え、デジカメで撮った写真を拡大してみると、そのように見えてきた。もう一度碑文を見に行つて指で刻まれたあとをなぞってみたら、字体はそのようであった。改めて文意を考えてみると意味が通じる。それにしてもこの言葉に初めて出会った。流石山田十竹先生であると自分の不明を恥じた。

書 頼元啓 (一八三三—一八九四) 明治四十一三年発刊「尚古」(広島尚古会) に掲載されている「藝藩儒者略年譜」(水山 烈著) によれば、「字は子明 通称は東三郎。誠軒と号す 嘉永三年三月六日家を継ぎ儒医組と為

次頁へ続く

る 明治二年八月二十四日第十一級師員と為り 同年十一月二十九日第十級教授と為る」と書かれている。

次に「広島県史 近世資料編1」に「芸藩志拾遺」第一八巻が採録されているが、その教育の項に頼元啓の名前が見られる。明治十四年九月、淺野長勲が「時勢の変遷に応じ学制を改革し、普通学を教授せしめんと欲し、特に山田養吉を抜擢し新たに該校教授と為し校務一切を委任せられる。此時公（長勲公）の養吉に与へられたる訓令は左の如くなりし

一 道徳を修ムルヲ以テ本校ノ主義トスヘキ事
一 生徒ノ品行ヲ正スヘキ事

一 学校資金一ケ年千五百円ヲ以テ之ヲ充ツヘキ事
一 滞京学資給与金一ケ年千円ヲ以テ之ヲ充ツヘキ事

但 教授ノ見込ヲ以テ年限ヲ伸縮スル事アルヘシ
明治十四年九月廿二日 淺野長勲

修道校教授 山田養吉殿

生徒教育の方針にして専ら漢学を講読する事と為し、而して洋算・習字・撃劍・游泳の四科を附属として教育せしむ、於是修道学校と改称す、十月四日養吉ハ東京より着校す、山田修平 立野寛等と学校の設備を為す、同月廿四日開校の旨を県庁に申告し、十一月十五日更に入學試験を為す、生徒四十四人之を三分して三教場即ち読書・算術・作文の試験を為せり、同廿五日開校す、是より日々教育に従事せり、開校当時の教員は左の如くなりしか後に増減する所ありし

- 算術 友村 久次郎
- 習字 頼 元啓
- 撃劍 岡部 蔦之助

漢学 最上 熊之助
塾頭 永田 音三郎

上の資料によつて山田養吉と頼元啓との関係を伺い知ることができよう。即ち、淺野長勲に要請されて修道校の校長となつた山田養吉のもとで習字の教員として共に教育に従事していたわけである。

「必正舎」について「新修広島市史」によれば、広島市制施行前にあつた私学（各種学校）として「必正舎」の名があげられている。「必正舎」は、袋町にあり、漢学を教授したとある。創立は明治廿年で、廃止になつたのは明治二十六年となつてゐる。明治二十二年度における生徒数は、男子二十七名、女子三名と記されている。

また「修道学園史」（六十九ページ）に紹介されている「木原秀三郎と神機隊」（武田正視著）には「文久三年（一八六三）二月、將軍家茂上洛のとき、江戸にとどまれという幕命と、京に上れという朝廷の命にはさまれ、小田原宿で苦慮する藩の世子淺野茂勲（長勲）の一行に対して、すでに先駆として京に上つていた木原秀三郎は頼東三郎（注 元啓のこと）と共に命がけで早馬を飛ばして小田原まで急行します。」と元啓の名が出てくる。

山田養吉の明治二十七年五月三十日の日記に「報有りて曰く昨元啓逝く」とある。

なお、この「修路記」の石碑の側面に「佐藤 正」と刻まれている。佐藤 正は、大正六年（一九一七）六月二十三日、山田養吉のあとを継いだ。校長水山 烈の葬儀に際して、修道中学校総理 佐藤正として弔辞を述べている。大正三年（一九一四）に建立された「十竹先生之碑文」の撰は、佐藤正によるもので、宮中顧問官陸軍少将従三位勲二等功四位と肩書きがついている。広島市の市長も務めた（明29・1・10〜明29・4・20）人である。

次頁へ続く

【口語訳】

修路記

わが広島市の竹屋町より段原村鶴見橋田間の道路はまがりくねっており、狭い上に道路面が低くて、じめじめしている。車も通行が難しく、馬も通行が難しい。長雨が降れば人もまた通ることができない。そこで、八木理助、菅原英之助、木本岩助、絹川保藏、亀屋圓晁、池田格次郎、長尾慎平の七人が仲間の先頭にたつて私財を投じた。(この道路の修繕の趣旨に賛同して)修繕に応じた者は三十余人。県の役人西村益三もまたこれに加わり、労役に使う馬を提供した。竹屋町より田中町を経て鶴見橋通りに至る真つ直ぐな道路の長さは二百二十七歩。そこに役夫二百人を当て、資財七百年を費やした。明治二十三年七月に工事を始め、翌明治二十四年四月頃に竣工を告げた。それによって道路は八十歩短縮され、道路の幅は十二尺に広がり、道路面も二尺の高さになった。それで車の通行が可能になり、馬の通行も可能になり、長雨が降っても通行が可能になった。通行する者は大いに喜ぶに及んだ。そこで多くの人々が私にその事を石に記すようにと要請するところとなった。

ああ、世間の人は皆心の中に次々とわき上がる欲望を潜ませていて、自分の利益をはかり、自分のものをなげ出すにしても、その痛みや損害を髪や爪に感じるほどでもなく、人に利益になることもまたしないのである。或いは人に何か利益になることをするにしても、その行為が(自分にとって)どういう成果をもたらすかを問題にするのである。すなわち、その空しいことといったら、まるで風をとらえ、影を捉まえようとするようなものだ。それなのに今、(この道路の修繕に関わった)大勢の人々は、自分の利益を求めない態度を変えることなく、自分のことはさておき、人のために尽くす。そしてその成果はまた先に述べたごとくである。自分もまたこの道路を往き来するたびに道路が通行しやすく便利になったことを喜ぶものであ

る。それで人々の要請を断ることなく、この碑文を記した。

明治廿三年 修道校主 山田養吉 撰 必正舎主 頼 元啓 書

校祖 山田養吉物語③

「十竹籃歌」(山田十竹先生の書画)

明治17年 縮景園

仲井正美(大1・元事務長)

修道には修道関係者の書画が多く残されている。なかでも「十竹籃歌」は山田十竹先生の書画として珍しいもので、平成4年(1992)6月、十竹先生の曾孫山田雅之氏から寄贈されたものである。

この書画は、縮景園が描かれており、その上段に4人の方が書をしたためているが、最初に十竹山人(山田養吉)名で「十竹籃歌」と題した一文が記されている。書画を収めている額は、旧制修道中学校33回卒業生有志(世話人景山崇人氏)から寄贈されたものである。

明治17年初夏、山田養吉先生が主催された宴が縮景園で開催された。その時の様子を書画に残したものである。現在本校校長室に掲示されている。

十竹先生は、この宴を「曲水の宴」にたとえ、また、「西園の雅集」を思いうかべ66人の参加者に籃に酒肴のご馳走を入れ、大いに飲み、大いに語ろうと呼びかけている。

この年は、浅野長勲公が浅野学校を改めて修道学校と名付けて東京の海軍兵学校から十竹先生を広島に招き、学校の総督に当らせた明治14年11月4日から3年目の節目の年であった。明治17年7月は司法省法学校の学生募集に前途有望の学生を応募させた年でもあった。

また、個人的には7月21日に先生の長男得一郎が泉邸裏で溺死するなど多端な年でもあった。この文は「十竹軒遺稿」(山田二郎編 明治37年本校記念品室所蔵)に「十竹籃」という題で掲載されている。

皆と一緒に浮世を忘れよう

十竹籃歌口語訳

甲申の年(明治17年)の初夏、縮景園で園遊の会を催した。来客は66人。私は、籃にいれた肴と瓶に入れた酒をご馳走した。籃の中には小さな盃をおき、籃と酒瓶を提げてそれぞれ好きな所で飲めるようにした。

山のてっぺんで蹲る人、水辺に座り込む人、石に寄りかかる人、草を敷物にする人様々で、まるで曲水の宴のようであった。西園の雅集を思い浮かべるようであった。この催しをするにあたって竹籃を買い求めようとしたが、広島に籃を売っている所がなかったので、浅手の籃を求め、これに紐を結んで籃がわりとし、手にさげやすいようにした。これは私が考えついたことなので「竹籃」の上に「十」の字を冠して「十竹籃」と名付けた。

では、歌を作って皆さんに勧めよう。十竹籃、十竹籃、右手に籃提げ、左手に酒。山菜、野草でしっかり飲み賜え。皆と一緒に浮世を忘れよう。

今日の仕事のことなどし賜うな

草の香りのする所に座るもよし、苔むした石に座るもよし、寄り集まって群れて飲むのも好きにし賜え。超然居や悠々亭で気の合った者と飲むのも、手すりに寄りかかって独りで飲むのも好きにし賜え。とにかく楽しく杯を手によればよい。そして今日の仕事のことなどし給うな。とにかくうっとりとして歌ったり、躍ったりすればよい。日がもう暮れるといい給うな。ましてここの庭には趣きのある所がたくさんある。

山に登り給え。橋を渡り給え。昨夜の心地よい南風が新緑の葉にふいた。新緑の葉はほんのりとした姿となって花を引き立たせるだろう。

主人も酒をたくさん用意している。今日酔わないでどうする。酔えば睡くなるだろう。そしたら暫らく睡り賜え。酔って帰りたくなったら好きなときに帰りたまえ。秋になって楓の色が鮮やかになったら、また竹籃を提げて飲みに来賜え。

私はすべてのことに要領が悪く、特に字が下手だ。今、この歌を書くのにも人に書いてもらおう

かと思っただが、やはり自分で書くのは、他人にうまく書いてもらって、自分の下手なのをかくすなどというやり方は、風流の約束事に反することになりはしないかとおそれただけのことである。十竹山人

写真は校長室に掛けてある「十竹籃歌立額」



十竹籃歌(複製)
山田 養吉

山田養吉の明治17年(1884) 52才

- 3月 生徒永尾司馬人を校費をもって東京に留学せしむ。
- 6月 司馬人書を送り、司法省法学生を募る、生徒を上京させ試験に 응ぜしむるべしと
- 7月21日 長男得一郎溺死

甲申初夏 十竹籃歌揮毫

7月 司法省法学校において学生募集あるや校長山田養吉は前途有望な学生手島兵次郎・山香二郎吉・梶山延太郎・秦野健二等をしてその募集に 応ぜしむ。

広島斯文学会講師

特別寄稿

東京は金 広島県・市は銀メダル

(修道サッカーOB, 七人の侍)

林 孝 治 (高校2)

第18回全国健康福祉祭ふくおか大会 (ねんりんピックふくおか2005) は平成17年11月12日(土)に常陸宮殿下・同妃殿下をお迎えして盛大に、ヤフードームで開会式が行われ、その後、各会場に分かれ15日(火)まで開催されました。

サッカーは博多の森陸上競技場、さわやかスポーツ広場、そして雁ノ巣レクリエーションセンター球技場の三箇所で行われました。

修道サッカーOBは東京から2名・広島県3名・広島市2名の七人の侍が出場しました。本大会は満60歳以上に出場資格が与えられます。今年、初めて出場した東京代表の藤田勉氏は体が大きく、足が早い。よく走る。寄ればハタク。また走る。ライン際でボールを持って突進する暴拳とも言うべき「怪物くん」でした。

広島サッカー黄金時代の伝統そのもの、圧倒さ

れ、各チームとも防衛に手も足も出ない状況でした。東京チームの中心選手を務めており、それに加えて、竹内民雄氏が後ろから十分なフォローアップをして攻守に活躍しています。東京の合計15得点は本大会の最高得点であり、今後にも簡単には破れない記録だと思います。

広島市の選手も、この二人に対応できる選手はおりません。広島市は彼等のために惨敗したと言っても過言ではありません。

しかし、東京のチームの中で修道OBがどんどん活躍して、大変に意を強く致しました。修道サッカーOBも東京で活躍している諸先輩に継ぐ、後輩の活躍を期待しております。ねんりんピックのテーマソングは「明日へとつづく道」であります。現役の活躍も併せて期待しております。

競技組合せ表

Bブロック

チーム名	1 北九州市	2 広島市	3 岡山県	4 東京都大江戸	勝 点	得失点	順 位
1 北九州市		0-6	0-2	0-6	0	-14	4
2 広島市	6-0		2-1	1-4	6	+4	2
3 岡山県	2-0	1-2		0-5	3	-4	3
4 東京都大江戸	6-0	4-1	5-0		9	+14	1

Eブロック

チーム名	1 埼玉県	2 広島県	3 宮城県	4 福島県	勝 点	得失点	順 位
1 埼玉県		1-2	1-3	3-0	3	±0	3
2 広島県	2-1		0-0	1-0	7	+2	2
3 宮城県	3-1	0-0		4-0	7	+6	1
4 福島県	0-3	0-1	0-4		0	-8	4



左から藤田 勉(高13回)、林 孝治(高2回)
竹内民雄(高10回)、高瀬正則(高9回)



▲脇 洋一(高15回)、石井正則(高6回)



大内 ^{アキラ} 晟(高11回)

特別寄稿

平成17年度修寿会

藤澤 洵 (元教諭)

退職教職員の集まり「修寿会」(会長・小田和磨、副会長・余語光子、河野富士雄、幹事・中山眞一、橋谷秀雄、藤澤 洵、会計監査・川野観治)の第19回総会・懇親会が、さる10月8日(土)、鯉城会館(県民文化センター内)において行われました。本年は21名の出席でしたが、久しぶりに

出席者された方も数名あり、いろいろとお話を聞かせていただきながら時間を忘れて大いに盛り上がりました。本年度は4名の方がお亡くなりになりましたが、新会員として阿部秀真氏をお迎えし会員数は87名となりました。



木村	中山	原本	有田	橋本	向井	吉崎
	藤澤	街道	河野	橋谷	島	田中正
的場	林高	川野	堤	小田	保澤	望月

第58回修道高等学校卒業式

第58回修道高等学校卒業式が平成18年3月4日(土)午前10時から大講堂で挙行され、290名の卒業生が巣立った。式当日は旅立ちの日にあふさわしい快晴の空模様であった。

式は山田薫学年主任が卒業生一人一人の名前を読み上げ、田原校長代行から卒業生代表荒井領君に卒業証書が手渡された。

学校長式辞の後、林正夫理事長、沖清PTA会長、大田哲哉同窓会会長から祝辞が述べられた。在校生代表成田恒輝君の送辞、卒業生代表割瀬圭佑君の答辞に続いて横畑貴章君から卒業記念品(中庭のシンボル時計)が学校長に贈呈された。

私学連合会長賞(建学の精神を体し、優秀な成績をおさめ、他の模範となった卒業生に贈られる)には土井田勉君が選ばれた。

また、校長賞(最も優れた修道魂を発揮した卒業生に贈られる)及び皆勤賞(中高6ヶ年間または高校3ヶ年間、無遅刻・無欠席であった者に贈られる)が授与された。受賞者は以下の通りである。

〈校長賞〉

土井田 勉 西田 学 馬場 健太
以上3名

〈皆勤賞 6ヶ年〉

小柳 航 一町 和史 加藤 真志
藤浪 理智 宮西 浩二 久保 輝幸
井東 俊也 以上7名

〈皆勤賞 3ヶ年〉

日置 京平 宮本 健吾 横田 巖
高松 亮平 永安 敦 増田 恭三
池本 崇志 板本 拓也 木村 太輔
高畑 大海 坂本 久幸 佐藤 壮真
早坂 啓佑 増田 尚也 中野 貴規
西原 英臣 山田 恭平 山本 光
渡部裕太郎 馬場 一統 松本 和也
重谷 健太 以上22名

卒業生並びに出席者全員で校歌を斉唱し、閉会となったところで恒例の「ちょっと待った…」が始まった。全員で保護者席と教職員席に向き直り、「ありがとうございました」と深々と頭を下げ、最後に制服の上着を式場に高々と投げ上げた。晴れ晴れとした笑顔を浮かべる卒業生の姿は満場の笑い涙を誘っていた。

同窓会長祝辞

修道高等学校 第58回卒業証書授与式にあたり、修道学園中・高同窓会を代表いたしまして、ひとことお祝いの言葉を述べさせていただきます。

皆さんご卒業おめでとうございます。

このたび、栄えある卒業証書が授与されましたことは、皆さんの日々たゆまぬ努力の結果であるとともに、これまで慈しみ、育てこられた保護者の皆様や校長先生をはじめ多くの教職員の方々の献身的なご指導によるものでもあります。

さて、本日もでたく卒業された皆さんを、我が同窓会にお迎えできましたことは、同窓生一同にとりまして心からの喜びであります。

中・高同窓会は第58回卒業の皆さんを含め、実に2万7千余名の同窓生を数えることになりました。

幾多の先輩は広く政治、経済、文化、法曹、教育、医療等あらゆる分野で活躍をされ、わが国はもとより広く国際社会において貢献をしておられます。これらの同窓生が相集うために関東支部や近畿支部など12の支部があり、また多くの職域や運動班、文化班のOB会等の同窓会組織があります。今後皆さんは全国各地に進学し、さらには各界で活躍されることになるとは思います。どうか地元広島はもとより他の地域や職域の同窓会を訪ね、多くの先輩方と積極的な交流を図ってください。

「同声は相応じ、同気は相求む。」ということわざがあります。「師を同じくし、机を共にした者

の親しみは、へだてのない兄弟の情に似ている。まして乱雲流転の社会に出れば同窓は心の通う友となる。」と言った意味であります。

3年間、あるいは6年間、共に過ごした学友はもとより、修道の名のもとに集う多くの同窓生との触れ合いは、今後の皆さんにとってかけがえない財産となり、これからの人生において、必ずや大きな支えになると確信いたしております。

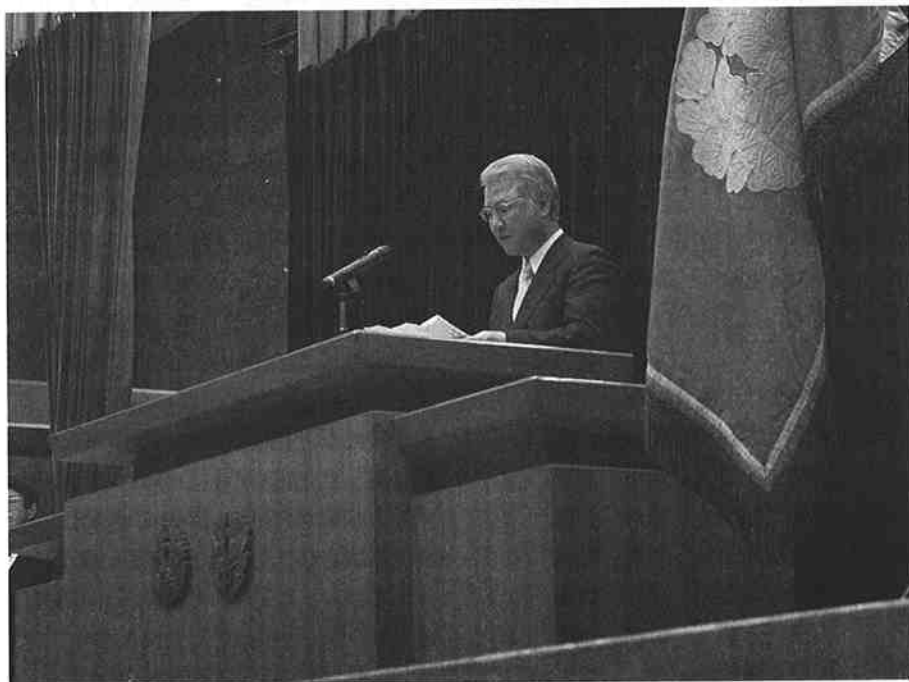
おわりに、皆さんの未来が前途洋々、順風満帆であることを心からお祈りし、やがて次代を担う有為な人材として雄飛をされんことを期待いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

本日のご卒業、まことにおめでとうございます。

平成18年3月4日

修道学園中・高同窓会

会長 大田 哲 哉



祝辞をのべられる大田会長

人物往来

ハーンが愛したニューオリンズ

風呂 鞏氏 (高8 比治山大学講師・ラフカデオ・ハーンの会事務局長)

米国ルイジアナ州最大の都市、人口46万人の3分の2を黒人が占めるニューオリンズが、超大型ハリケーン「カトリーナ」の直撃で史上最悪の被害を受けた。

ジャズと綿花と砂糖の町であるニューオリンズ。ポンチャートレイン湖とミシシッピー川に囲まれた海拔ゼロメートルの地形に貧困が複合し、復興の見通しは立っていない。深夜まで歌や生演奏であふれる旧市街フレンチ・クオーターの熱気もまた、過去のものになってしまったのだろうか。

ニューオリンズは若き日の文豪ラフカデオ・ハーン(小泉八雲)が新聞記者として10年滞在し、こよなく愛した町だ。1718年、フランス人によって建設され、一時スペインに譲渡されたこともあるが、1803年米国の領土となった。こうした歴史的背景から、この町には異文化(ヨーロッパの文化と黒人文化)が混じりあう新しい文化「クオール文化」が育った。

1877年、ニューオリンズに到着したハーンはクレオール文化に魅了された。「初めてこの町へやってきて喜びを感じない人は少ないし、この町を去る時に名残惜しさを感じない人は少ない。この町の魔力は神秘的で、甘美で、誰もこれを逃れることは出来ない」(「ニューオリンズの魔力」という一文がある。(略))

84年12月、この町で「万国産業綿花百年記念博覧会」が開幕。日本政府の展示にハーンが関心を示した。会場でハーンは日本政府派遣の服部一三と出会い、「古事記」の存在を知る。やがて90(明治23)年、文部省普通学務局長の職にあった服部は、来日したハーンに旧制松江中学の英語教師の職を世話した。万博での出会いが、ハーンの14年の日本滞在につながった。

ハーンはニューオリンズに10年間滞在し、それが彼の日本研究の基礎になったことは明らかである。(略)

ハーンの曾孫の小泉凡氏(鳥根女子短大助教授)は今、ハーンの視座として「自然・異界との共生」

「多文化の共生」を提唱している。ニューオリンズの町とその文化が一日も早く、復興することを望みたい。(中国05.2.27)

「やるぞ」意欲だそう

林 有厚氏(高1 関東支部会長・東京ドーム社長)
— 広島活性化には何が必要なのでしょう。 —

「広島は元気がない」とよく言われるが、県民性として元気に暴れまわるようなことが好きな人が多いはず。どうしてこれほど縮こまってしまったのかと、逆に残念に思う。カーブの嶋重選手や中国電力陸上競技部の尾方剛選手など、長年地道に努力して日の目を見た人もいる。マツダはドイツが実現できなかったロータリーエンジンを完成させた。同様の威力を広島の人は持っていると思う。それをどうして出さないのだろうか。「ダメだ、ダメだ」というのではなく、「やるんだ」という勢いをみせてほしい。

— 広島で中高6年間を過ごされていますが、印象深い思い出は。 —

戦時中だったので、学徒動員で広島陸軍兵器補給廠に従事した。原爆投下時は宮島にいて直接被爆は免れたが、下級生を中心に多数の在校生が犠牲になった。一方、当時は人生で最も多感な時代で、素晴らしい思いでもいっぱいだ。宿題で書いた小説が同人誌に掲載され、評判を呼んだことは懐かしい。同窓会の関東支部会長を務めているが、当時の仲間は今でもいい友人。東京ドームのタイル張りの壁画は、同級生の画家平山郁夫さんに制作してもらったものだ。(中国05.11.23)

料亭「三滝荘」幕閉じる

藤田 欣也氏(高12・三滝荘社長)

囲碁や将棋の名勝負の舞台として知られた広島市西区三滝町の料亭「三滝荘」が1月31日で60年の幕を閉じる。ホテルとの競合に加え、接待文化の衰退にも翻弄された。戦後の広島を彩った老舗の灯が、また1つ消える。

三滝荘は二千八百平方メートルの広大な敷地に、述べ約二千平方メートルの木造2階が立つ市内の料亭で唯一の規模。日本庭園も備える。昭和初期の和洋折衷の豪邸だった。原爆による焼失を免れ、

先代の故藤田嶋次郎社長が1946年、割烹旅館として開業した。

祝い事や法事などに使われ、内外の要人も宿泊。60-90年代には基聖戦や棋王戦の舞台になり、96年には羽生善治九段の年度内7冠にも立ち会った。

バブル崩壊後は企業の交際費引き締めの影響もあって客足が伸び悩み、この10年は赤字続きだったという。「日本式旅館に泊まりたい」との外国人の要望で続けていた旅館部門は、一足先に昨年11月末で取りやめ。藤田欣也社長が今年4月に65歳になるのを機に、料理部門も店じまいに踏み切った。

藤田社長は「老朽化した建物に設備投資する余裕がなかった。料理屋文化を引き継げず、未練はある」と無念さをにじませる。建物や土地の活用方法は決めていないという。(中国06.1.31)

犯りに地域連携必要

広畑 史朗氏(高校23・福岡県警本部長)

福岡県の刑法犯認知件数は昨年、初めて16万件を突破した。激増の背景をどうみるか。

「2つの『ボーダレス化』が主な原因ではないか。1つは『国境のボーダレス化』。国際化に伴う外国人犯罪の増加だ。もう1つは『国内のボーダレス化』。少年犯罪は凶暴・凶悪化し、大人顔負けの犯罪も目立つ。非行少年とまじめな少年の区別もつきにくくなり、最近では『あの子がなぜ…』という犯罪も多い。また、成人の犯罪も、暴力団とそうでない人の犯罪の区分けがなくなった。押し寄せる『ボーダレス化』の波に、警察は対応しあぐねている」

「街頭犯罪抑止総合対策室」の設置で、増加に歯止めがかかるか。

「都市部と農村部では治安情勢が違うわけで、地域の実情に合った対策が必要だ。一朝一夕に効果が表れるかは分からないが、中・長期的に必ず目に見える形で成果を上げられると確信している」

「検挙に勝る防犯なし」から「抑止に重点を置く」への方針転換については、どう考えるか。

「地域や学校、家庭がうまく機能し、それぞれが問題を解決できた時代は、警察は検挙だけに力を入れておけばよかった。しかし、家庭内暴力(DV=ドメスティック・バイオレンス)や児童虐待、ストーカーなど、その犯罪を未然に防ぎ、

被害を出さないためには、ある程度は警察が市民生活に介入せざるを得ないケースも出てきたということではないか。社会全体が防犯を担ってくれていた時代とは、前提条件が違うことを認識しなければならない」

「犯罪抑止に向けて一般の人に要望したいことは、

「県民の中には『治安を警察だけに任せていいのか』と考える人もいる。そうした人たちと協力しながら、地域、学校、家庭で犯罪が発生しづらい環境を作っていく必要がある。警察に任すべきことと、自分たちで担えることを考え、それぞれの場面で協力してもらえたら、真に犯罪に強い社会の構築につながるのではないか」(読売03.2.20)

飛び石 よみがえる深み

上田 宋岡氏(高校16・上田宗箇流家元)

2002年に閉園した旧浅野藩ゆかりの庭園「萬象園」の飛び石が、茶道上田宗箇流の茶室の露地に復元される。同じ旧浅野藩ゆかりの縮景園を流祖上田宗箇が作庭しており、その縁で萬象園の所有者だったNTT西日本が同年に寄贈。このほど、上田流で書院屋敷などの本格改築が実現することになり、再び日の目を見る。

広島市中区羽衣町にあった萬象園は旧三原浅野家別邸で、江戸初期の1657(明暦3)年に築庭。縮景園と同じ回遊式大名庭園で「縮景園に次ぐ名園」と評され、元安川の景観を借景に、大小さまざまな石組みや老松古木を配していた。戦後は電電公社(現NTT)が購入。宿泊施設・結婚式場になったが、経営事情から閉園し、取り壊された。

閉園に伴いNTT西日本は、作庭家齋藤忠一さんと上田流の上田宋岡家元に庭園の現況の記録作業と監修を依頼し、資料集「萬象園」を作成。あわせて飛び石を中心にした庭石82個を上田流に寄贈していた。

書院屋敷や茶寮和風堂の改築が昨年始まった上田流では、寄贈された飛び石を使い、和風堂の外露地の飛び石50個の大半を入れ替える。既に着工し、3月に完成する予定。齋藤さんは「数百年を経た萬象園の石は深みがあり、質感が違う。打ち水しても、より長く保水できる」と解説する。

また、萬象園で最も目を引いていた緑泥片岩の

奇岩「青石」を書院屋敷の庭の正面に据え付けた。「明」の一文字を外側に彫り、宗箇の好みが感じられる手水鉢なども譲られている。これらは齋藤さんが現地で選んだ石で、引き続き作庭を監修する。

当時、NTT広島支店長として閉園業務に携わった西村憲一・NTTネオメイト社長は「原爆で市街地が壊滅した広島にあって、萬象園は後世に語り伝えたい文化財だと思い、あらためて調査してもらった」と振り返る。宋岡家元も「高い塀で囲まれた外露地は、凜とした空気が張り詰めた宗箇独特の空間。そこに同じ江戸時代の飛び石を使うことで、より歴史的な意味を持つ」と考えている。
(中国06.02.07)

自分の哲学確立して

梶野 俊雄氏 (高校6・ヒロテック会長)

今の学生には、明確な目標がないね。僕はこれが一番の問題だと思っている。人生の中で、仕事であろうと家庭であろうと、将来こうなりたいという目標がない。新入社員の面接なんかで、この人たちはどんな人生を送りたいのかと疑問に思うことがよくあるね。

僕は大学を出て、父親が経営する梶野製作所(ヒロテックの前身)に入った。自由に自分の経営をしたいと思ったのが入社の本音だね。それから間もないころ、あるアメリカの漫画を読んで驚いたことがあった。主人公の車にクーラーがついてないから恥ずかしくて、真夏なのに窓を閉め切って運転した、という内容。驚いたね、当時、50年代の日本では車を持つこと自体が難しかった。日本とアメリカではこんなに差があるのかと。この国に追いつきたいと思ったよ。

若いころはとにかく仕事をした。朝8時から深夜0時まで、土日もないという生活。自動車のプレス業界で日本一になりたいと思っていた。具体的に目標の会社を定めて、あの会社を抜いてやろうと。その会社を抜いたら、また別の会社を目標にした。

会社は技術第1主義で少しずつ世界の自動車メーカーに認められるようになった。入社当時、約30人しかいなかった社員も今では800人。世界の関連会社も含めれば3千人。あのゼネラル・モーターズ(GM)からの仕事を海外の工場ですることになっ

た時は、もう僕の考えていた夢を越えていたよ。

僕は人生の基礎を作るのは学生時代だと思っている。僕の場合は、負けず嫌いで仲間になんか負けないからけっこう勉強をした。だから学生にはちゃんと勉強して基礎となる土台をしっかりと築いてほしいと思う。そして、人生とは何かを真剣に考え、自分の哲学を確立すべきだ。最近、大学は遊ぶところになっていて人生を考える機会が無くなっているのではないか。社会に出たら本を読む時間はなかなかないよ。これからどのように生きるのか、というヒントは先人の生き様にあるから、多くの偉人伝を読んでほしいね。理想や目標のない人生は、人生をつまらなくすると僕は思っている。

もし、いま僕が若かったら、海外の小さなベンチャー企業に入ってトップを目指すね。自分を鍛えるのはこれが一番いい。国内でも海外でもいいのだけれど、小さな会社のトップというのは経営から営業から、何でもやらなければいけない。これはいい勉強になるし、上も横にもいっぱい人のいる大企業より絶対おもしろいと思うよ。

そうではない場合も、僕は社員によく言うのだが、会社に入ったら、一社員としてではなく常に社長の目で物事を判断してほしい。採用する際もこの点を重視している。社内では、上や下、部門同士の摩擦はあるが、広い視野に立って「こんな時、自分が社長だったらどう判断するか」と考えられるようになってほしい。
(朝日06.02.04)

魅力輝く広島へ住民が鏡

新原 芳明氏 (高校20・信託協会専務理事)

この1月、中国電力の招きで、エネルギーマネジメントスクールの講師として、広島経営者の方々に、ヨーロッパと広島の比較について話をさせていただいた。

パリ郊外のベルサイユ宮殿の中に、太陽王ルイ14世の暮らした王の間があるが、予想外に殺風景である。案内人によれば、着飾った貴族が集まってきた時、ちょうど美しくなるのだそうである。パリの星付きレストランでも、花や絵画を美しく飾っているが、客にとってお互いの様子が一番の室内装飾となるよう配置されている。鏡が多いのも、レストランという舞台に出演している自分の

姿を確かめるためである。

都市も同じであり、いくら建物や美術館などをそろえても、世界から人々を引きつけることはできない。その中の人たちの生き方が大切である。

パリのソムリエや店員は、何がおいしく、割安か、どのワインが合うのか、故事来歴、何でも質問し、会話も含めて楽しんでもらうことに生きがいを感じている。メニューを見て、すぐに注文しては、がっかりされる。「あなたの助言で今日は本当に楽しかった」と言った時の彼らのうれしそうな顔は忘れられない。

あるブランド店で、スカーフを一枚買おうとしたら、予算から贈る相手の髪や目の色まで聞かれ、表にない商品まで出して、念入りに選んでくれた。パリには、納得のいくまで相手の人生を楽しませてあげようというプロ精神がある。

イタリアのラベンナで夏を過ごした際、妊娠していた妻が日本から来ていた父と買い物に出かけて戻って来ない。捜したら、ミラノ郊外から来た、それほど豊かそうでもない老夫婦一家の部屋で休ませてもらっていた。妻が道でめまいを起こしたのを三階から見つけて、声をかけて、助けてくれたとのこと。おなかの子のためにと一生懸命、食事を勧めてくれていた。

イタリア人が道を間違えて教えるのは、いいかげんだからではなく、あまりにも親切なので、気の毒で知らないと言えないという説は、本当だと思う。

広島は、世界都市として三つの良い条件を有している。

第一に、あの江戸と同じ規模の人口、つまり、世界的な文化を生み出すのに十分な百万人の人口を持っている。第二に、平和都市として東京に負けない世界的な知名度を持っている。そして、第三に、緑が豊かで樹が大きい。ヨーロッパ諸都市を訪れて、最も風格を感じさせるのは、街の中の樹の大きさである。その点、広島は、市の中心部で樹が大きく育っている。

こうした良い条件を持つ広島が、世界から人々を引きつけるために一番大事なのは、住民がそれぞれの舞台に立ち、伸び伸び楽しむとともに、決してこびることなく、来訪者を楽しませ、そして、それを自身の楽しみとすることである。

ところで今や企業にとっても、直前の文章の「住民」を「従業員」に、「来訪者」を「顧客」に置き換えると、全く同じことが求められている。

エネルギーマネジメントスクールの一層のご健闘をお祈りする。都市広島、そして広島の企業に大いに発展していただきたい。(中国06.02.12)

耐震偽装 信頼回復へ法整備を

錦織 亮雄氏(高校9・広島県建築士会会長)
一偽装を見抜けなかった行政や民間の指定確認検査機関の責任も指摘されています。建築士としてどう見ますか。

今回はあくまで特殊な事例だ。他の建築士ではあり得ない。ただ建築確認制度については、責任の所在があいまいになっている点はある。

今回の問題を、これまで行政がやっていた確認検査を民間に開放したからという見方があるが、それはおかしい。民間が確認能力で劣るということはない。ただ民間では検査機関同士の安値受注競争が激しくなっている。そのために検査がおろそかになるということがあってはならないが、本来は時間をかけてじっくり検査するのが仕事だ。それを早く、人を使わないで、といった価値観が入るのはまずい。料金は全国一律にするなどのアイデアが必要だ。

一問題が起きた背景をどう考えますか。

起きてはならないことが起きたと感じる一方、今の体制では起こるべくして起こったとの印象も同時にある。

なぜなら、建築設計にかかる法整備は遅れているのが現状だ。例えば一級建築士の資格は一度取れば、ずっとそのまま。技術は日進月歩だ。資格を更新制にして、新しい技術を学んでいく制度に改めるべきだろう。

一再発防止には何が必要ですか。

木造住宅のような建物ならばだれでも耐震上、危ないかどうか分かるが、今のように複雑な高層ビルなどはブラックボックス状態で一人の建築士では分からない。

だから構造計算を専門に手掛ける建築士が要る。構造計算はだれが担当したのかなど役割分担を明確にして責任の所在が明らかになるような法的整備

備が必要だ。

一県建築士会は一月に市民向けの構造計算セミナーを開きました。狙いは何ですか。

複雑な構造計算について、分かりやすく説明して市民に理解してもらいたいと開いた。参加者の中には、実際に偽装を心配しておられる町内会長さんもおられた。全員初めて見る構造計算書に高い関心を示した。われわれ建築士にとっても住民にとっても、いい建築とは何なのかという議論はもっとしていかなければならない。セミナーは今後も続けていきたい。(中国06.02.14)

規模生かし中小に貢献

高木 一之氏(高校10・広島信用金庫理事長)

「企業の合併、買収(M&A)や経営分析などを通し、中小企業に貢献できる」。広島信用金庫の高木一之理事長は、11月に旧大竹信用金庫と合併した意義を説明する。規模のメリットを生かすと同時に、大竹市でのビジネスマッチング(商談会)など中小向け事業を強化する。

合併による店舗網の拡大により、顧客の利便性向上や地元密着の経営姿勢をアピールする。経営方針についても「(旧大竹信金とは)地域の相互扶助という方向性を共有しており、組織の一体化も進みやすい」とみている。(日経05.12.2)

今年は「バトル」の年

白倉 茂生氏(高校6・中国電力社長)

「今年は株価の急上昇でバブルの年と言われていたが、私に言わせれば“バトル”の年」と語るのは中国電力の白倉茂生社長。「放送会社とIT(情報技術)企業との間でのM&Aなど株式を巡る争奪戦が相次ぎ、我々の業界でも規制緩和の動きが顕著だった」というのが理由。

中国電力にとっては九州電力が域内で電力供給を始めた年だけに「バトル」という言葉には実感がこもる。「自由化の波に耐えながら足元を固めることが大切」と競争に勝ち抜く力を蓄える重要性を強調していた。(日経05.12.06)

同級生交歓

加藤 俊宜氏(高校19・革新企業研究所代表取締役)



(前列右から)

大歳 卓麻(日本アイ・ピー・エム社長)

森安 俊紀(東芝執行役常務)

山本 裕治(第一興商常務取締役)

石堂 一成(東京コンサルティング社長)

(後列右から)

川村 健一(ホスフェクス社長)

野崎 敬二(アート・パル工房代表取締役)

福田 定直(東洋オフィスメーション社長)

加藤 俊宜(革新企業研究所代表取締役)

私たちは広島市にある私立修道高等学校19期(昭和42年卒)の仲間。修道学園は広島藩の藩校を起源とし、05年に創立280年を迎えた伝統深き学校である。私たちは20年ほど前に東京で「自修会」という勉強会を結成し、現在も毎月集まっては親しい交流をつづけている。

大歳は高校時代から学力、人柄ともに抜群に優れていた。東大工学部に進み、現在は日本を代表する経営者の一人として活躍中。森安は慶応大工学部の大学院まで進んだ。単なる技術屋さんでなく、人間的魅力を併せ持つ半導体メーカーのリーダーとして世界を駆け巡っている。山本は地元の広島大政経学部へ。趣味のフルマラソンのように地道な努力によって、コンテンツ事業で知られる企業で経営の一翼を担う。石堂は京大工学部へ。小柄ながらも持ち前の倫理観あふれる理念を遵守し、コンサルティング会社を創業した。川村は、私の軟式庭球のパートナーで高校時代に一緒にインターハイ出場。卒業後は京大工学部へ。プラント会社での豊富な国際経験を活かし、サステイナブル(持続可能)なコミュニティづくりの第一人者として活躍中。野崎は早稲田大文学部へ進み、

二十代で起業に成功。小説家志望を秘めつつ、同窓会幹事として縁の下の力持ちに。福田は東工大工学部へ。総合商社で磨かれた国際センスと気さくな人柄を活かし、現在は関連会社で経営の舵を取る。私は早稲田大学法学部へ進み、今は自宅のあるお江戸で自修会幹事を務めつつ、起業した京都と生まれ故郷の長州を行ったり来たり。五十代後半を迎えた今、高校時代の友と過ごす時間は、何ものにも替えがたい宝物である。

(06 文芸春秋2月号)

積極的な融資で地域発展に貢献

森本 弘道氏 (高校7・もみじ銀行頭取)

「銀行は雨が降ったら傘を引っ込め、天気になったら傘を持ってくると例えられたように、これまでは必ずしもニーズに答えきれない面があった」と話すのは、もみじ銀行の森本弘道頭取。

今後2年間の中小企業支援策などをまとめた地域密着型金融推進計画に、担保に過度に依存しない融資の推進を盛り込んだ。「うたい文句だけでなく、積極姿勢で融資していく」と強調する。

計画は、事業再生や創業支援なども柱にしている。「金融機関は地域の発展と活性化のために存在すると固く信じて、役職員一丸となって努力したい」と力を込める。

(中国05.12.07)

計 報

黒田 進氏

(旧中20 元修道学園事務局長・理事)

2006年1月2日逝去。94才。修道学園同窓会評議員。元マツダ取締役。

中丸 昭司氏

(大商01・高12 前岡山修大会会長)

2005年12月19日逝去。64才。広島修道大学同窓会岡山修大会設立に参加。初代会長をつとめられた。

平岩 久雄氏

(高11 アクト中食会長)

2006年1月24日逝去。65才。修道学園同窓会連合会幹事、修道学園(中・高)同窓会幹事・評議員をつとめられた。

当選おめでとうございます

平成17年9月11日投票がおこなわれた衆議院議員選挙で修道OB4名の方々が当選されました。当選された方々は次のとおりです(敬称略)

亀井 静香(高校7)・増原 義剛(高校16)
齊藤 鉄夫(高校22)・松本 大輔(高校42)

お詫びと訂正

平成17年3月に作成いたしました「修道中学校・修道高等学校募金報告書」に掲載誤りがございました。心よりお詫び申し上げますとともに、次のとおり訂正いたします。

正	誤
募金者区分 芳名	募金者区分 芳名
旧中37 益本 茂	有志 益本 茂
旧中37 西村 孝博	有志 西村 孝博
高校6 山下 嗣	有志 山下 嗣

平成17年9月に作成いたしました同窓会報誌修道57号の「歴代校長・学年主任・学級担任一覧表」に掲載誤りがございました。心よりお詫び申し上げますとともに、次のとおり訂正いたします。

頁	回数	組	正	誤
1132	13	7	久保田(和)	久田
1132	30	7	林(高)	林 武
1133	32	学年主任	川野	山崎
1132 1133	14, 20, 22, 33, 35		久保田(和)	小田和

事務局だより

会報へのご寄稿、支部、同期会などのご報告につきましては、ご多忙中にもかかわらずご協力いただきありがとうございます。今後も会報への記事を募集いたしておりますので積極的に原稿をお寄せいただきますようお願いいたします。次回、会報59号の発刊は平成18年9月の予定です。